

地域の時代は可能か

東北芸術工科大学

東北文化研究センター所長 赤坂 憲雄 氏

東北の20世紀は故郷を棄てた時代

今、「地域」という言葉が盛んに使われていますが、この言葉はそれほど古い言葉ではありません。ついこの間までは「地方」、戦前には「郷土」という言葉が好んで使われていました。「地域」という言葉には、少なくとも中央や国家の補完物であるという「地方」とは違う何かが託されているように感じられます。

ところで、20世紀の初めあたりから盛んに使われてきた「ふるさと」という言葉が気になっています。私の父の故郷は福島県東白川郡鮫川村大字渡瀬です。私は子どもの頃、父と一緒にその村を訪ねたことがあります。私自身は東京生まれの東京育ちですので、自分には故郷はないとずっと思ってきました。私が30歳代半ば頃、仕事のついでに父のふるさに立ち寄ってみたことがあります。夕暮れ時でしたが、子どもの頃の遠い記憶を思い返し、集落の中を歩いてみました。高台に上っていくと小学校があり、その手前に1本の標柱が立っていて、そこには「旧名主赤坂家別邸跡」と書かれていました。それを読んだとき、私は大きな衝撃を受けました。心がざわざわするのですが、その意味がよくわからないのです。父を通じてつながる祖先がこの村にいたことだけは確かだ、と実感したからかもしれません。

私のように東京生まれ東京育ちの人間、あるいは都会暮らしの人々のほとんどは、2～3代さかのぼるとみな地方出身者です。東京のような都市は、いわば地方出身者の末裔たちがつくったのです。私の父などは、故郷を棄てたのかもしれないし、あるいは故郷に棄てられたのかもしれない。故郷を棄てるということは何を意味するのか。父のふるさを訪ねた三十代半ばから、私は心の中でずっと問い続けてきました。この問いは、私だけでなく、都会に暮らすたくさんの人たちが共有しているものなのかもしれません。そして、まさにそこに、都市と村・地域をつなぐもう一つの関係、絆といったものを問いかける基盤があるのかもしれないと感じています。

文部省唱歌の中に、ふるさをテーマにした歌がいくつかあります。その歌詞を丹念に読み込んでいくと、ある一つのことが見えてきます。歌詞のどこにも書いてはいませんが、明らかに主人公は旅の人です。故郷を離れて異境をさすらう、あるいは都会に出て暮らしている男であり、年齢はどうかや中年以降の人です。旅人である中年の男は、いわば故郷を棄てた、または故郷に棄てられた男たちです。秋の夕暮れや夜、孤独に、あるいは寂しさにまみれながら、立身出世の夢が破れて、その挫折感にやるせない思いを抱きな

がら、ノスタルジーの対象として故郷を思い歌っているわけです。苦くて甘やかで、そして遠い幻のような故郷。文部省唱歌の中では故郷は常に過去に属しています。たくさんの日本人によって懐かしく歌われてきた文部省唱歌の中のふるさとは、ある意味では、ふるさと、地方、地域というものの原風景のようになっています。

このような詩が歌われる背景には、20世紀という時代に地方から都市への大規模な人口の移動が起こったことがあります。次男、三男は村にとどまることができずに集団就職あるいは出稼ぎで都会に出ていきました。そして村では過疎化が進み、ついには集団離村の形で消えてしまった村もあります。東北の20世紀は故郷を棄てた時代として記憶されることになるのかもしれませんが。

新たな帰郷の時代へ

しかし、出稼ぎの時代はもはや遠ざかりました。何かがいま変わってきているように思えます。人々が村から都会へと出て行く流れに、いくらかの底打ち感が窺えるとでも言えばよいのでしょうか。聞き書きをしながら村や町を歩いていると、地域づくりに取り組んでいる人たちの中に、しばしば都会から農村に帰ってきた帰郷者がいます。ふるさとに帰ってきた人たちの姿がどこでも見られます。

故郷に帰る形にはいろいろあるでしょう。Uターン、Iターン、Jターンといろいろな名づけられています。例えば、山形県高島町には星寛治さんという大変すぐれた指導者がいて、有機農業を中心としてさまざまな活動を行なっています。その高島町には、60人以上の若者たちが農業に夢を抱き、農業をするために移り住み、そこで家族をつくっています。移り住んだ若者たちのほとんどは高島町出身ではなく、別の地方から来ています。これもまた故郷に帰る一つの形だろうと思います。60人という数字は少ないようにも見えますが、私は大変な数だと思います。この人たちを受け入れた高島町はすでに姿を変えつつあるだろうと思います。新たな帰郷の時代が始まるのかもしれませんが。少なくともその予感を私は感じています。

私は、今から13年前に山形に新しくできた東北芸術工科大学に赴任するとき、心に決めていることがありました。東北に行って、「東北学」という新しい知の運動を起こそうということです。それはなかなかうまくいかずに試行錯誤を繰り返しましたが、ようやく五年ほど前に大学の中に東北文化研究センターという小さな研究所をつくることができました。そこを拠点にして、『東北学』という雑誌をつくるなど東北学に関わるいろいろなことをやっています。私は、これも一つの帰郷のスタイルだと思っています。

昨年(2003年)4月、私は会津にある福島県立博物館の館長になりました。その話をいただいたときに、私は二つ返事で引き受けていました。いずれ福島へ「帰りたい」と思っていたからです。会津の各地を歩いてわかったのですが、会津は実は、父の母方の血筋につながるところで、ある意味ではふるさとの一つとも言える土地だったのです。自分の血が会津にまでつながっている。あらためて会津の村や町を歩きながら、私はやっとふるさ

とに帰ってきたのかもしれないと感じています。

地域とはだれのものか

地域はだれのものか。これは、変な問いかけかもしれません。例えば、ある町の背後に小さな山があり、そこが切り崩されてキャンプ場になりました。自然が豊かで里山の風景が残っていたそこに、自然公園と称して木を大量に伐採してキャンプ場がつくられたのです。これは、30年以上前の国家プロジェクトとして計画され、そこに45億円のお金がつぎ込まれたと聞きました。けれども、その山の中は1年の半分以上が雪に閉ざされます。そんなところにキャンプ場をつくるのが、どのような意味を持つのか。地元の人たちの雇用の場がえられるわけでもないし、地域の経済には何の影響もない。地域の主体性というものが無視され、上から補助金や交付金という形のお金が降ってきて、キャンプ場が作られているわけです。だから、そのお金を全部使い切るために、切らなくてもいい木をわざわざ切って、もう一回木を植えるという無駄なことをするようになります。

こういうことはもう止めようと、極めて当たり前のことを、たとえば島根県の片山知事があるテレビ番組の中で述べていました。地域、あるいは地域主義というものがいま大きな可能性を持って表に出てきている、それだけは否定できないだろうと思います。あらためて地域とはだれのものか、という問いかけが生まれてくると思います。

縄文の「定住革命」とともに

昨年秋、私は、鹿児島の上ノ原遺跡という9500年前の縄文遺跡を訪ねました。そこは日本で最初に定住が始まった村の遺跡です。湾に臨む高台の上にあります。桜島の噴火によって村が何度も壊滅しています。それにもかかわらず、人々はそこに戻ってきては村をつくり、定住の村を営むということを繰り返してきました。そこでは1万年前から定住の暮らしが営まれてきたらしいのです。それは「定住革命」と呼ばれています。

移動の生活から定住の生活へと変化すると、ごみや排せつ物の処理が大きな問題になります。移動の生活の中ではごみや排せつ物を置き去りにしても、1年後にそこに戻って来たときには、それらはすべて消えてなくなっています。ところが定住の村が営まれるようになると、そうはいきません。死者の埋葬をどうするか、墓地をどこに営むか。定住という暮らしはそうした問題を大変切実なものにします。そして恐らく人々は、あの世とはどこにあるのか、そんなことも考え始めたはずですし、土器などの家財道具も生まれてきます。移動の暮らしの中では、家財道具は必要最小限のものしかありませんでしたが、定住生活では土器を初めとして継続的に使うことができる多くの家財道具、いわば財産というものが発生してきます。

また、かつて移動から移動へという暮らしの中では、その集団に何らかのトラブルが起こった場合、トラブルを起こした家族同士が分かれて、別の集団に入っていくということで解決されていたと思います。ところが定住して村を営むとなると、簡単に外に出ていくことができません。持続可能な村というものをどのようにデザインするか、それが大切な

問題になってきます。1 万年前の日本列島に定住という暮らしのスタイルが生まれたとき、それまでとはいろいろなものが大きく変わったのです。

多様な人に開かれた地域へ

ところが、もしかすると私たちが生きているこの時代は、1 万年間の「定住の時代」が終わりを迎えているのかもしれない。

例えば、日本海に浮かぶ飛島（山形県酒田市）という小さな島があります。飛島の人に「島の人口は今何人ですか」と尋ねると、「うーん、500 人はいないな、400 人ちょっとじゃないか」と、あいまいな答えが返ってきます。しかも、人によって答がまちまちです。誰も島の人口をきちんと把握していないのです。この小さな島で不思議なことだなと感じましたが、冬に飛島を訪ねた時に、そのわけがわかりました。私が夏に泊まった旅館は冬にはみな閉ざされていて、人がいません。彼らは夏には飛島で暮らしていますが、酒田にもう 1 軒家があって、冬にはそちらで暮らしているのです。また高校に通うような子どもたちは酒田に住んでいて、庄内のどこかの高校に通学していますので、おばあちゃんや母親もまた賄いのために、夏でも子どもたちと一緒に酒田で暮らすようになります。つまり家族がばらばらに暮らしています。これでは「人口は？」と聞かれて、島の人たちが「正確にはわからない」と答えざるを得ないと思いました。

しかしこの現象は飛島だけのこととは思えません。いま村や町を歩いていると、村に家はあるけれども仕事の場は町場にあるという人が多いのです。仕事場のある町場に住んでいて、土日だけ村の家に戻ってきて田んぼ仕事をしているという人も珍しくありません。村に生まれ、村に育ち、村で暮らすといった古典的なイメージからはかけ離れた姿が、いまや当たり前になりつつあるのではないかと思いますね。

定住とは一体何なのか。最近、観光に携わる人たちの間では、「交流人口」ということがしきりに語られています。村に定住しているわけではないけれども、旅、観光といったことを含めて村や町を訪れてくる人たちがいます。その人たちを交流人口というのですが、それに注目して、例えば 100 万人の交流人口は経済的には 1900 人の定住人口に匹敵するといった試算が出されています。

確かに定住を古典的にとらえて、その地域に生まれ、育った人がその地域の主人公であるという考え方に縛られていると、いま起こりつつある現実は見えないのかもしれない。生まれ育った人もいる、そして一度故郷を離れてまた戻ってきた人もいる、あるいは生まれ育ったところとは別の村に移り住んだ帰郷者たちがいる。さらに、そこを訪れてくる人がいる。旅人や観光客、そして滞在する人もいるし、あるいは引っ越して、転入してくる人もいる。いま地域はそれぞれに、そうした多様な人々に対していかに開かれていくか、多様に開かれた地域のイメージというものをどのように提示できるか、といったことが問われているのかもしれない。縄文以来の 1 万年に及ぶ定住の時代は、もしかするといま終わろうとしているのかもしれない。

いわば地域社会が定住ということを自明として、その地域に生まれ育った人々によって支えられていた時代は、次第に過去のものになるうとしています。少なくとも従来の古典的な定住を中心とする考え方から脱却し、新しい開かれた村の形というものを創っていく必要があると思います。

辺境としての東北イメージをいかに超えるか

地域に暮らす新たなアイデンティティー、あるいは地域の絆といったものを新たに創造していく時代が訪れようとしています。だからこそ、いま「地域の語り部」が求められています。自らの地域について、その歴史や文化や風土について、自らの言葉できちんと語るができる人々のことを、私は「地域の語り部」と呼んでいます。東北から1万人の語り部が登場するとき、東北のイメージは根底から変わるに違いありません。この1万人という数字には大して根拠はありません。ただ、たくさんの語り部たちが東北の村や町から誕生して、彼らが自らの言葉で自らの地域について語り始めるときに、何かが大きく変わるに違いないと思っています。そして、すでにそうした動きはさまざまな形で起こっています。

十数年前に私が山形の大学に赴任すると決めたとき、とりわけ関西の友人たちはとてもおもしろい反応を示しました。私がまるで島流しにでも遭遇したかのように同情してくれたのです。当時、東北にある大学に行くということは、そういうマイナスのイメージを持たれていたのです。私自身は、東北でやりたいと思うことがあったから東北の大学を選んだわけですが、ほとんどの人は2~3年もしたら東京に戻ってくるだろうと思っていたようです。彼らにどんなに説明をしても、納得しないだろうと感じましたから、私はただ笑ってその場をやり過ごすしかありませんでした。

私の勤務する大学の名称がもし「山形芸術工科大学」だったら、多分私は選ばなかっただろうと思います。「東北芸術工科大学」だったから私は選んだのです。しかも、いずれこの大学を母体として「東北文化研究所」をつくる構想があるという話も聞かされていました。私は、それをずっと信じていましたし、つい5~6年前に「東北文化研究センター」という形でそれは実現したわけです。

山形に来てから、私は辺境としての東北イメージをいかに超えるか、という問いかけに一貫してこだわってきました。東北に行くと言ったら、まるで島流しにでも遭うように同情したくれた人たちを見返すためにも、辺境としての東北をいかに超えるか。寒い・暗い・貧しいという、『おしん』に代表されるような東北のマイナスイメージはどこからやって来たのか。それはどうしたら払拭できるのか。これは依然として大切な課題だと思っています。

東北の豊かさをきちんと語るべき時代

『おしん』の批判をすると、山形では「町おこしに影響するからやめてくれ」と言われます。私は山形に赴任してすぐに「さらば芭蕉」と書きましたら、これも批判されました。

東北ではどこに行っても「奥の細道」がもてはやされています。よそからやって来た偉い文学者、知識人によって語られた東北のイメージというものに、そろそろ決別ののろしを上げる必要があると私は思います。「芭蕉が宿泊した」ということがその地域の人々にとってどういう意味を持つのか、もう一度問い返してほしい。身をゆだねるのではなく、もっとしたたかに、しなやかに利用すればよいのです。芭蕉が句を詠んだ。その句はすばらしいかもしれないが、そこに身をゆだねてしまったらおしまいだと私は感じています。

確かに寒い・暗い・貧しい東北がかつてはありました。けれども、私がこの十数年、東北の村や町を歩いて聞き書きしてきた中で、そんなふうには貧しい東北に出会ったことは一度もありません。すでに東北は十分なほどに豊かになっています。三世代家族では、世代ごとにテレビがあり、居間があり、そして大人の数だけ車がある。そんな暮らしのどこが貧しいのでしょうか。でも、東北の人々の心の中には、貧しさの幻影がまだどこかに残されています。

いま、経済的な豊かさだけに縛られることなく、東北の歴史や文化や風土の豊かさをきちんと語るべき時代に入っています。プラスのイメージを持った人や物や景観といったものを、東北からどのようにしてつくり出すか。だれもが当然のことのように気づいています。いまはそれを実行するときだと思えますね。

多様な民族や文化が共に生きる

第5次全国総合開発計画の中で語られている東北のイメージは、なかなか魅力的なものです。そこには一極一軸型の国土構造から多軸型の国土構造への転換ということが言われています。これまでは東京を中心とした太平洋ベルト地帯が突出した形で発展し、それがそのほかの地域に波及するというスタイルだったわけです。でも、これからはそれぞれの地域、東北なら東北という地域がその自然や風土や文化に根ざした形での発展をめざす、いわば多軸型、多極型の発展があってもいいということです。だからこそ東北では、例えば21世紀を先導する自然共生型社会を目指すという方向も出てくるのです。歴史資源の活用や貴重な自然資源の保全整備等を通じた地域づくり、これも当然のことです。東北独自の情報を発信するための知的センターという言葉もありました。そこに示された向かうべき方向は、間違いなく正しいと思っています。しかしバブル経済の破綻とその後の混乱の中で、多軸型の国土構造への転換といったことがたちまち引っ込められてしまい、見えなくなりました。また国家経済の破綻が迫っているという状況の中で、地方と国家がある種の深刻な綱引きをえています。

私自身は、日本文化の見方ということにかかわって、一つの中心がある、一つの日本があるというイメージではなく、この日本列島にはいくつもの多様な地域文化が並び立っていたのではないかと考えています。いくつもの日本が存在したはずだという問題提起をしながら、私は東北学という新しい知の運動をつくってきました。それは単に東北の問題にはとどまらず、恐らくグローバル化ということが叫ばれるこの時代の中で、最も大切なテ

ーマになっていくと思っています。それは多様な民族や文化が共に生きるための、共存するためのモラルあるいは思想といったものをいかに創り出すかという問題です。

やがて地域の時代が始まる

いま、アメリカという巨大な「帝国」は、自らを唯一の絶対的な基準として世界に広がっていきこうとしています。全世界を均質化していく巨大な暴力ですね。その中では世界が金太郎アメ化していく可能性があります。ある側面ではそれは避けがたい流れかもしれませんが、けれども、いまイラクを中心としたイスラム世界で何が起きているかということは、きちんと問いかけておくべきだろうと思います。資本主義的な市場原理の中では、弱者はどのように立ち向かうことができるのか。民主主義は、確かに社会のさまざまなトラブルを調停する大変適切な、あるいは今のところは唯一の思想、イデオロギーかもしれませんが、それがそうした土壌を持たない社会に落下傘のようにおろされるとき、何が起こるのか。このことを真剣に考えておく必要があります。

イスラムの世界で起きているさまざまな血なまぐさい出来事の中に、一神教の問題が見え隠れしています。世界をつくった「神」への信仰がブッシュのアメリカにもまたイスラムの世界にもあって、それが激突しています。しかし私たち日本人の中にはそうした唯一絶対神に対する信仰といったものはあまりありません。むしろ一木一草にも、名もなき小さな神が宿っている。そういうアニミズム的な感覚の方が私たちにはむしろ親しみやすいのです。石ころの中に宿っている神は、我々に人を殺せと命令することは絶対にありません。日本人に見られる神々への信仰がこの時代の中で何を主張することができるのか。甚だ心もとないことではありますが、もしかしたら全てのものに神々が宿るという宗教感覚がとても大切になるのかもしれない。いずれにしても、グローバル化の時代であるがゆえに、自分とは何か、自らが暮らしている地域とは何なのかということを実際に考える必要があります。そういう問いかけの上に、やがて地域の時代というものが始まるのだろうと思っています。

多様な「地域の記憶」を掘り起こす

最近、私の中では「東北の記憶」ということが大切なテーマになりつつあります。東北の大地に埋もれ、刻まれている記憶。おそらく、私が東北学という知の運動を通して掘り起こそうとしてきたものがそれだと思っています。個性的な顔を持った地域をいかにデザインし、演出するか。現場からの声に真剣に耳を傾ける必要があります。あるいは、今そこに生きている人々の姿に目を凝らしてみたい。地域にはたくさんの声なき記憶が埋もれています。その土地の記憶を一つ一つ掘り起こしていく。それがやがて未来を豊かに彩る地域資源になっていくはずです。

土地の記憶を一つ一つ掘り起こしながら東北を歩いていて感じたのは、東北は一つではないということです。いくつもの多様な東北があるのです。そのいくつもの東北を掘り起こす中から、新しい東北イメージが、東北の歴史観、文化・風土のイメージが立ち上がっ

てくるのではないかと思います。

辺境としての東北イメージをいかに超えるか。「みちのく、道の尽きる、そのさらに奥に広がっている文化果つる世界」という辺境イメージをどのように超えていくことができるのか。これについては具体的に触れている余裕はありませんが、地域に埋もれた東北の記憶、そしてそこに孕まれている多様性といったものが東北の辺境イメージを乗り越え、将来の東北に向けての大きな糧となり、財産になるはずです。

あるがままを肯定することから

この十数年、私は東北の村や町でおじいちゃん、おばあちゃんの人生や生業を聞き書きしてきました。炭焼きをずっとしていたおじいちゃんの話聞いていたときに、「ああ、これが私の父の人生なのかもしれない」と感じたことがあります。東北の記憶に耳を澄ますことは、私の極めて個人的な体験としては、ついに聞くことができなかつた自分の父親の人生を追体験して、それを肯定したいという欲望から出てくることなのかもしれません。父は、福島県鮫川村で生まれ、若いときに東京に出て、そこで炭を扱う燃料商をやっていました。そしてある時期に福島に戻って、山を買って炭を焼かせる山師をやりましたが、その事業に失敗してまた東京に戻っています。わずかに知っている父親の人生というものを私は今までどこかで恥ずかしいと感じていました。今にして思えば、私が東北にやってきた動機が一番深いところに、父の人生を何とかして肯定したいということがあったのかもしれません。

私の聞き書きを読んでもくれた読者の方から、東北に生きる誇りを持てるようになったという感想をもらうことがあります。あるいは私の講義を聞いていた女子学生の一人は、私が訪ねた村の隣村で育った人でしたが、レポートの片隅に「先生の聞き書きを読みながら、涙があふれてとまらなかつた」と書いてくれたこともあります。これらの感想はとてもよくわかるのです。私が聞き書きしていることは、どこにでもあるありふれた小さな人生に過ぎないかもしれません。でも、それでいいのです。そこに生きていた、その姿のままでもいいのです。それは、あるがままを肯定するということなのではないでしょうか。自分を肯定する、そこから新しい出発ができるのかもしれないと、私自身は感じてきました。私のそのメッセージは読者の中のある人々には届いていると思っています。

自らを語る言葉を獲得したとき、東北は変わる

東北が自らを語る言葉を獲得したとき、東北は変わっていくでしょう。東北には豊かな自然の風土や文化があり、歴史があります。しばしば誤解されているのですが、例えば東北の森の8割から9割は二次林です。原生林ではありません。二次林というのは、人間が長年かかわってつくってきた森ということです。東北の風景を見て、「大自然が豊かに残っていますね、原生的な自然が残っていますね」とたたえてくれる人たちがいますが、その人たちが前にしている風景は、東北に暮らしてきた人々が少なくとも1万年の歳月をかけてつくってきた自然であり風景であるということです。つまり、それも東北の文化の一つ

のあらわれだということです。いまはそういうとらえ返しがさまざまな形で必要とされている時代だろうと思います。

「地域資源」というキーワードが、この後のシンポジウムでも多分出てくるだろうと思います。例えば会津でいま、昔からつくられてきた野菜、伝統野菜を復活させようという小さな動きが始まっています。伝統野菜とは、昔からその地域だけでつくられてきた野菜です。そうしたものが新しい時代の中で新しい地域ブランドの核になっていく可能性は大きいだろうと思います。いわば、伝統というものが後ろ向きにではなく、前向きに再評価される時代がそこまでやってきているのです。それはさまざまなレベルで、さまざまなスタイルで語られているし、すでに実践されていることでもあります。

私たちのこの時代が求めているのは、いくつもの日本、縄文時代以来の1万年の時間にいだかれた日本なのかもしれません。その1万年という時間の深さと南北2000キロ以上に及ぶ空間の広がりの中で、今まで語られたことのない日本、いくつもの日本のイメージが必要とされているのだろうと思います。そのとき東北は、マイナスのイメージを自ら一つ一つ払拭し、壊しながら、自らの歴史や文化や風土というものを1万年の時間の中で再発見していく必要があります。そのとき初めてそれぞれの地域の文化は新しい時代をつくる糧として、地域資源として新たな命を吹き込まれて、いまここによみがえってくるのかもしれない。

「なんじの足元を深く掘れ、そこに泉あり」

地域学というものがさまざまな場面で語られています。あるいは「地元学」という言葉を使う人たちもいます。地域の再認識、しかもそれは定住を絶対視することなく、さまざまな人たちが行き交い集う、そういう開かれた場としてデザインされていく必要があるでしょう。私は「東北の記憶」ということにしばらくはこだわりたいと思っています。これから10年ほどの歳月をかけて、1万人の地域の語り部を育てることをめざす。そして、ひっそりと地域に埋もれている家の記憶、村の記憶、あるいはもっと小さな「私の記憶」といったものを呼び覚まし、そうした記憶の群れが歴史の語り部となる。そんなことを私は夢に描いています。

地域の時代は可能か、この問いの向こう側に、私たちはすでに足を大きく踏み出しているのだと思います。70年も前に沖縄の地で沖縄学という地域学を独力でつくろうとした伊波普猷という人がいました。その大学者が座右の銘にしていた言葉があります。

「なんじの足元を深く掘れ、そこに泉あり」

地域をよりどころとして豊かに生きることを願う人たちに対して、この言葉は贈り物のような、そんな言葉だと思います。この言葉に励まされながら私自身もさらに東北学という知の運動をさまざまな形で展開していきたいと思っています。

どうもありがとうございました。

(小見出しは編集者による。)